

## 「阿弥陀文字圖像板碑」 庶民信仰の表現



▲新寺地区の阿弥陀文字圖像板碑(市有形文化財平成3年指定)

板碑は、仏教や民間信仰の普及により、鎌倉時代から室町時代にかけて盛んに造立され、石造物のなかでは、供養塔婆の代表といえます。板碑の詳細は以前紹介していますが、今回はそのうち、阿弥陀如来を文字と圖像で表現した阿弥陀文字圖像板碑を紹介します。

板碑の多くは、仏を梵字で表している(種子)のに対して、圖像板碑は、阿弥陀如来、地藏菩薩、観音菩薩、不動明王などの仏を圖像で表現しています。市内では南北朝時代から室町時代を中心に造立された28基が確認されています。

この圖像板碑の中には、文字や梵字と圖像をミックスした面白い表現のものが見られます。中でも佐原地区では南無阿弥陀佛の6文字を圖案化し、それに顔や手足を付けて阿弥陀の像容としているものが7例知られています。

新寺公会堂の横にある小さな墓地内に、コンクリートの基壇で固定された11基の板碑があります。板碑は2列に配列され、そのうち前列左端の板碑が阿弥陀文字圖像板碑になります。

高さ82・5cm、最大幅55cm、厚さ12・13cmの雲母片岩製の石の上部や右側に刻離や欠損が見られ、上方が広く、下方が狭い不整形をしています。

年代は、寛正4年(1463)の銘文があり、室町時代の造立であることがわかります。

圖像は、踏割り蓮座の上に立っている阿弥陀を表したもので、頭部は「南」頸部は「無」胸部および腕部を「阿弥」腹部を「陀」脚部を「佛」の文字で形成しています。文字は圖案化され、阿弥陀の衣のように見えます。

また、下部の左右に観音、勢至の種子があり、阿弥陀三尊を形成しています。このような三尊形式で表される阿弥陀圖像板碑は、県下でも数が少なく貴重な考古資料となっています。

問い合わせ  
生涯学習課 ☎(50)1224